

令和4年度

事業計画書及び収支予算書

公益財団法人

神津牧場

令和4年度 事業計画

1. 情勢と方針

牧場経営を巡る情勢は甚だ厳しい。新型コロナによる人流、物流の停滞、価格の上昇、働き方改革等に伴う人件費の上昇と人員の確保、牧場の施設・機械の老朽化などである。

新型コロナウイルス感染症は世界的な広がりの中で、次々と新たな変異株の発生と流行により2年を過ぎてもなお、終息の見通しが立っていない。ウイルス株の変異、対応したワクチンの接種や薬の開発、治療法などの進展によって、重症化リスクや死亡リスクの低減が認められているが、新しいオミクロン株の感染拡大により、再び人々の行動や社会経済活動にも大きな影響が出ている。

牧場はふれあい牧場として地域の観光の柱となっており、ひとが訪れ、景観を楽しみ、そのことが高付加価値畜産物の販売と結びついている。新型コロナはこの人の流れを断ち切ったことから牧場の収益は直接的に大きな影響を受けた。令和2年は春の繁忙期にほぼ販売活動が半減したことにより大きな影響を受けたが、令和3年にも春や夏の繁忙期の緊急事態宣言等で、令和2年とほぼ同様の減収を余儀なくされた。また、新型コロナは世界の物流にも影響しており、間接的に牧場経営にも影響を及ぼし始めている。濃厚飼料は昨年、約3割の価格上昇が見られた。輸入粗飼料は物流の停滞により供給が懸念されている。また、ガソリン価格、電気料も値上げが続いている。さらに、最近では資材や原料価格の値上げが相次いで続いている。

さらに、牧場では、平成29年に製酪工場をリニューアルしたが、耐用年数を遥かに超えた生産機械や搾乳施設、牛舎、宿泊施設を使用しており、その修理や更新も顕在化し始めている。令和3年にはダンプトラックの更新、ホイールローダとボブキャットの修理、ロールバレーの更新が相次いで必要となった。

当面の対応として、令和2年には政策金融公庫から2000万円、農協から2000万円の緊急融資を受けたが、令和3年も更に1000万円の融資を農協から受けるに至っている。コロナ禍が長期に渡る中で今後の展望は不透明であるが、本年もwithコロナの時代に向けては神津牧場が目指す資源循環と6次産業型の牧場経営を守りながら、できることを積み重ねて、可能なチャレンジを行う。

原料等の値上がりに対する対応

- ・ 原料、資材等の値上がりに対応しては値上げを検討する。

コロナに対する対応

- ・ 感染リスクの低減のためには基本的な対策を行う。すなわち、職員も含めて、屋内での3密(密閉、密集、密接)の回避や手洗い、マスクの励行を呼びかける。食堂などでも人数を制限して、可能な限り開放空間とする。

販売の強化

- ・ コロナ禍での販売動向を分析すると、当初(令和2年度上期)は通信販売やギフトの販売が好

調であったが、その後はギフトの販売が低下した。令和3年度では通信販売は好調を維持しているが、ギフト販売は低迷した。コロナ禍での通信販売の有利性が認識され、通販業からの参加の誘いが多くなっている。牧場の HP での通販が一定の成果を上げているのは価格競争に巻き込まれないブランドと品質への信頼の賜物であろう。

- ・ 2年間の経験から HP での通信販売を強化する。ふるさと納税やギフトは取扱業者、町との連携を密にした取り組みとする。対応するオリジナルセット商品(受賞チーズのセット)の提案、地元業者との連携による商品の開発を行い、販売の拡大を図る。

広報宣伝

- ・ 販売を促進するためには広報宣伝が重要となる。これまでもメディア等を用いた宣伝を行ってきた。今後も機会を積極的に捉えて行きたい。
- ・ 群馬県では観光振興として、多くの動画コンテンツ(ツルノス)を作り始めている。協力し、活用していく。また、映画撮影場所の誘致を行っているので、情報提供を行う。
- ・ 昨年からは、菓子原材料として乳製品を求める取引が増えている。単なる原材料としてではなく、「神津牧場の〇〇を使った・・・」との宣伝効果を期待してのものもある。販売だけでなく宣伝媒体ともなるので、積極的に進めていく。

イベント・体験

- ・ これまで2年間行えなかった花まつり等のイベントは無理のない範囲で、開催をすすめる。来場者の牧場での行動は屋外中心となるので、コロナ対策はこれまでと大きく変わらない。
- ・ コロナ禍で十分システム化されていなかった新しい体験として、「牛追いツアー」を行う。
- ・ 牧場主催の宿泊型牧場体験教室は一回の人数を制限し、回数を増やして行く。また、親子だけに限らず、大人にも広げていく。
- ・ 小学生、中学生向けの団体の体験は可能な限り受け入れていく。

牧草・家畜生産

- ・ 生産基盤である牛舎施設及び生産機械の老朽化が著しい。昨年にはダンプトラックの更新やホイールローダ、ボブキャットの修理、ロールベアラーの更新が重なって生じた。搾乳施設やトラクタも耐用年数を超えており、更新が必要となっている。
- ・ 群馬県によるシカの捕獲事業は順調に進められている。年を追うごとに捕獲頭数が減少しており、出現頭数の増加は抑えられているものの、被害は見えるほど軽減していない。今後も捕獲実施者の猟友会、モニタリング調査の(株)野生動物調査事務所、シカの生態調査を行っている麻布大学や農研機構とも協力して、対応する。

2. 事業に関する事項

<公益目的事業Ⅰ:ジャージー種牛の放牧酪農経営における6次産業化モデルの構築に関わる調査・実証・研修事業>

1) ジャージー種牛の飼養

(1) 草地管理及び飼料生産

- ・ 循環型の草地管理を目指し、採草地は家畜排せつ物と廃菌床を原料とする堆肥の散布、放牧地は尿素等の購入肥料により、生産を維持する。
- ・ 放牧家畜の配置は従来通り本部地区、肥育素牛の放牧は峠地区、育成牛放牧は桶萱地区とし、本部地区では高栄養の牧草供給のため、短草利用と季節生産に対応した兼用利用を図る。
- ・ 貯蔵飼料は上述したように、シカの食害(2,000万円程度)が著しいが、一部電気牧柵による被害回避を試みている。群馬県の捕獲事業とも連携して、フレキシブルな兼用利用をおこなう。
- ・ なお不足になることが最近常態化しているため、次善の策として地域資源から稲WCSの調達も行う。
- ・ 草地の老朽化も進んでおり、計画的な草地の更新も必要となっている。

(2) 放牧飼養技術の確立及び乳牛改良・種畜供給事業

- ・ これまでの共同研究や草量調査から10月以降の放牧地からの栄養供給が不足となることが明らかとなった。
- ・ このことから10月以降の放牧方法や放牧地植生の改善のため、兼用利用を含めた放牧地の利用方法や施肥管理を改善する。
- ・ 東京農業大学との共同研究の成果をとりいれて、能力改良を進め、牛群検定などの結果を有効に活用し、繁殖管理の徹底、選抜淘汰の実施により、産乳能力の向上を図る。
- ・ 和牛の受精卵移植による子牛生産・販売(5ヶ月齢;30-60万円)を行い、技術確立と評価を求める。

(3) 放牧受託(公共育成牧場)

- ・ 本年も4月下旬から10月中旬までの夏期預託放牧による公共育成牧場事業を行う。
- ・ 家畜保健衛生所の協力を仰ぎ、衛生管理と繁殖管理を重点とし、人工授精技術の向上に努めて事業を遂行する。
- ・ 近年、受託農家が減少しているが、受入可能頭数は50頭程度であるので、農家へのアピールを積極的に行い、受託頭数の増加を図りたい。

2) 畜産物の利用・加工技術の開発

(1) 乳製品の利用・加工技術の開発

- ・ 神津牧場ではチーズ、パック牛乳、ヨーグルト、アイスクリーム、ソフトクリームについて独自技術による製品化を実現し、神津牧場ブランドを確立している。
- ・ 消費者のニーズの多様化対応してはちみつバター、森のにんにくバター、モッツアレラチーズ、スパイスチーズ、サラミケーゼ、トマトアンドバジル、下仁田ねぎチーズなどの新商品の開発を行ってきた。特にチーズはJapan Cheese Award(日本チーズプロフェッショナル協会主催)や国産ナチュラルチーズコンテストで受賞している。本年はWorld Cheese Awardsへの出品を予定している。
- ・ 本年度も新たな商品開発を行うと共に、菓子メーカーなど共同して、新たな商品開発を行う。

(2) 肥育・加工

- ・ 放牧牛肉は、おいしさの成分や各種の機能性成分、 $\omega 3$ 脂肪酸を多く含むことが明らかにされてきている。
- ・ 神津牧場ではジャージー牛の2シーズン放牧肥育による赤身肉生産を行っているので、この特徴と肉製品のうまみの積極的な宣伝し、放牧牛肉の市販に繋げる。
- ・ また、廃用雌牛も加工品やレトルトなどを開発して新たな製品化と販売チャネルの拡大(ふるさと納税返礼品)を図っていく。

(3) 放牧養豚

- ・ 豚熱の国内での発生と野生イノシシの豚熱の感染拡大が続いており、今年も牧場での放牧養豚を中止する。

(4) 実習生・研修生の受入れ

- ・ コロナ感染に留意し、人数制限して、長期の研修者を優先して、受け入れを行っていく。
- ・ 畜産後継者の研修として、農業系大学生、農業大学校生、動物専門学校生を対象とした実習生の受け入れを今年も行う。

(5) 乳製品の卸販売

- ・ 牧場内で作られるジャージー牛乳やジャージー牛肉を原材料とした乳肉製品を高価格で販売して行くことが真の評価につながり、最終的な6次化産業モデルとなる。
- ・ このため、「日本最古」、「放牧」、「ジャージー牛」、をキーワードとしてブランディングを行い、消費者ニーズと商品と販売チャネルの対応を明確にして、商品開発と販売戦略の構築を図って行く。
- ・ このことにより、場内の売店のほか、各地の道の駅などの販売強化につなげて、牧場の財政基盤の確立にも努める。
- ・ また、贈答商品の販売チャネルとして、郵便局、デパート、ギフト業者等との連携を強化するとともに、インターネットを通じた販売やギフトに積極的に取り組む。
- ・ 各地で開催されるイベント等に参加して消費動向の把握や地域連携をつくって行く。
- ・ また、牛乳・バターは製菓・パンの原料としての需要も強く、素材としての利用など新分野の開拓をしていく。

(6) 外部機関との共同研究事業

- ・ 麻布大学の野生動物研究室との共同研究として、アナグマの生態調査などを継続する。成果は多面的機能のひとつとして、体験学習などに利用する。
- ・ イノベーション創出事業でのペレニアルライグラスの永続性実証研究は終了したが、継続しての観察には協力することとした。

<公益目的事業Ⅱ:牧場の持つ多面的機能の発揮促進事業>

(1) 牧場体験および緑資源の高度利用

- ・ 神津牧場は「妙義荒船佐久高原国定公園」の中核に位置し、群馬県に生息する大型野生動物12種のうち10種が確認され、豊かな自然が形成されている。この豊かさは森林と草原がモザイク状に配置された景観にある。また、放牧により形成される草原生態系は独特な動植物を育

む場となっており、生物の多様性を育む基盤となっている。これらの自然資源や牧場資源はグリーンツーリズムや保健休養機能として、多くの人に親しまれてきた。今後も体験学習などをおして、牧場の自然を積極的に展示・発信を行っていく。

- ・ 「家畜飼養管理基準」に則って、畜産理解醸成を図るべく酪農教育ファームとして、これまで整備された施設を活用し、幼稚園から大人までを対象を広げて、日帰型あるいは宿泊型の牧場体験プログラムを充実させていく。
- ・ 体験としては草食家畜のエサとなる牧草の刈り取り体験、刈り取った牧草の給与体験、子牛の哺乳体験、搾乳牛の乳搾り体験、放牧家畜の観察(ガイドツアー)、夜の牧場探検(夜の家畜の観察)、バター、アイスクリームの畜産物製造体験など様々なプログラムを作成して畜産の理解醸成を図る。
- ・ 外部機関との共同研究による成果をシカ、イノシシの獣害対策や各種の自然体験プログラムに取り入れ、親子牧場体験などに活用したエコツーリズム事業にさらに発展させていく。

(2) 家畜とのふれあい及び畜産理解醸成

- ・ 動物とのふれあいは多くの国民のから期待される場所である。飼養管理基準に留意しつつ、畜産の理解醸成に努める。
- ・ さらに、動物とのふれあいに資するためポニー、ウサギ、山羊等の飼養展示を行い、積極的に動物との接触体験ができるように工夫をおこなう。
- ・ 情報発信の手段としては体験プログラムのチラシを作成配布する他、ホームページをさらに充実させ、ブログ等も通じて最新情報を発信する。

<収益目的事業>

- ・ 神津牧場ロッジでは来場者に対し、飲食、宿泊、売店の営業を行う。物販は牧場の生産物を中心に特色のある品揃えを行う。
- ・ 隣接地には世界遺産の構成資産である「荒船風穴」があり、牧場の観光拠点としての役割も期待されている。そのため、下仁田町や佐久市の観光協会等とも連携して、地域活性化の取り組みを行う。
- ・ 昨年設置したミニ資料館では牧場の歴史的資産などの公開や、牧場の宣伝を行う。また、地域情報の宣伝にもつとめ、妙義荒船佐久高原国定公園の中核としての役割を果たす。
- ・ 「道の駅しもにた」の神津牧場ミルクバーでは物販と喫茶の営業を行うとともに、神津牧場の宣伝を通して、公益目的事業の強化と下仁田町の地域活性化に資する。

<参考:令和4年度における外部との共同・協定試験研究(◎継続予定、●は終了済)>

- ◎ 農研機構畜産研究部門(藤森・内山)
 - ・ 新品種の永続性についての継続試験(ペレニアルライグラス、オーチャードグラス)
- ◎ 野生動物被害対策調査:麻布大学(塚田・南)、農研機構中央農業研究センター(竹内・秦)、NPO 法人あーすわーむ
 - ・ 牧場内にカメラ・ビデオを設置し、出現動物の種類と数の把握。

- ・イノシシ及びタヌキによるカーフハッチ、肥育牛舎の盗食防止対策の実験。
 - ・シカの被害解析と防止策。
 - ・電気牧柵による獣害回避効果を検討。
 - ・発信機による野生鳥獣の位置測定
 - ・赤外線カメラを利用したタヌキの盗食被害の実態と回避策の検討
 - ・ニッポンアナグマの生態調査
- 農林水産省所管の競争的資金「イノベーション創出強化研究推進事業」＜育種対応型＞
 課題名：寒冷地・温暖地における高品質多年生牧草の育成と利用年限延長のための技術確立
 代表機関：(国立研究法人)農業・食品産業技術総合研究機構 畜産草地研究所(上山)
- BLV 根絶のためのアブトラップの設置：（国研）農研機構 中央農研センター(白石)、
 群馬県西部家畜保健衛生所(今井)
 - ・各草地に捕集のためのアブトラップを設置し、経時的に捕集し種類を同定。
 - ・BLV 清浄化のための対策
- 草地診断に基づく草地管理： 畜産草地研究所(山本・平野)、県畜産協会
 - ・草地の植生調査及び収量調査。・飼料成分の測定。
 - ・ライジングプレートメーター法を用いた牧草採食量の測定。
 - ・荒廃草地の追播更新試験。
- 山羊を使った雑草管理の実証試験： 家畜改良センター長野支場、上野動物園
 - ・継続実施、管理地の拡大。
- ジャージー牛の乳生産に影響を及ぼす栄養要因とその制御機能の解明：日大(梶川)
 - ・機能性成分 CLA 産生に対する大豆給与の効果(放牧によって産生される共役リノール酸の増強を大豆によってさらに強化できるか)
- 放牧牛肉の機能性成分： 九州沖縄農研センター(常石)
 - ・放牧ジャージー牛肉の機能性成分の測定。
 - ・牛肉の肥育様式と機能性成分の関係解明。
- 放牧牛乳のプレミアム化のためのデータ蓄積：畜産草地研究所(梶村)
 - ・放牧ジャージー牛乳の機能性成分による高付加価値化。
- 堆肥発酵の促進技術の開発： 畜産草地研究所(阿部・小島・山本・平野)
 - ・インパクトエアレーション方式と廃菌床の利用による堆肥化試験の継続。
 - ・草地への施肥効果の試験を継続。
- 神津牧場のジャージー牛の遺伝的変遷：東京農業大学(古川)

神津牧場の繁殖データを提供することにより、データベース化と創業以降のジャージー種の遺伝的系譜が明らかになることが期待されている。